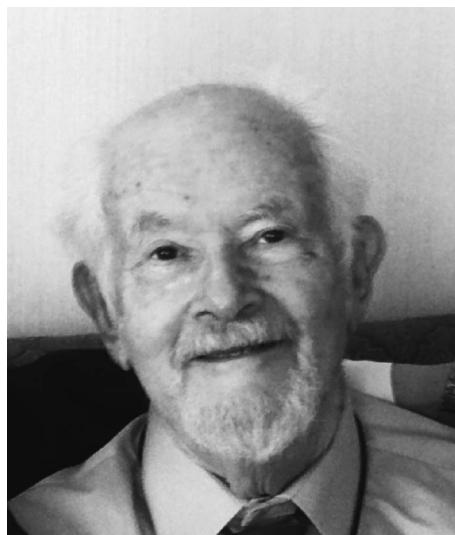


## Henry Freiser 先生を悼む

1920年米国ニューヨーク市に生まれる。1941年 City College of New York を卒業、1944年 Duke University で博士号を取得。1944~45年 New Dakota State College の分析化学及び物理化学科主任、1945~46年 Mellon Institute of Industrial Research 博士研究員、1946~58年 Pittsburgh 大学助教授を経て1958年から Arizona 大学教授で長期にわたり研究に従事。その間UCLA (1968) 及び京都大学 (1972) で客員教授、Universidad Autonoma de Gadelejara 名誉教授、日本分析化学会より名誉会員に推挙された (1981年) ほか、米国化学会や IUPAC において数々の要職を歴任。1978年米国化学会より Fisher Award in Analytical Chemistry を、1996年には International Solvent Extraction Conference で Hanson Medal を受賞した。



2013年8月、本会名誉会員 Henry Freiser 先生は93年の生涯を閉じられた。先生は多くの日本人に好意的に接して下さい、多くの日本人研究者を育てて下さった業績から1981年に本会名誉会員になられた。特に1958年にアリゾナ大学教授として就任されて以来、毎年のように数名の日本人ポスドクを雇用して下さい、Freiser 門下生の日本人連絡係を仰せつかった筆者の手元の日本人リストには80名ほどの研究者が名前を連ねていた。この中のほとんどの研究者が本会の会員である。

筆者が Freiser 先生に招いていただいたのは1985年10月からの1年間であったが、ちょうどこの年の本学会年会で故関根達也先生が分析化学会賞を受賞され、筆者はこのお祝いに駆けつけるため、渡米を3週間ほど遅らせた。この授賞式のパーティー時に関根先生はお祝いの挨拶をされた先生方の中で Freiser 門下生を「小松君、アリゾナグループの〇〇先生」とその場で38名の著名な先生方を紹介して下さい。筆者はその数の多さに圧倒されたが、現地に着任する前に幸運にも「アリゾナ人脈」を手に入れることができた。特に Freiser 研究室での修業を終えた帰国直後の本水昌二先生(岡山大学)と田口 茂先生(富山大学)には「How to live in the desert!」を伺い、朝晩と昼間で30℃以上気温差があるツーソンでの生活に関しての「生活の知恵」をたっぷり伝授して頂いた。筆者はその直後に家族でアリゾナへ出向いたが、現地には梅谷重夫先生(京都大学)及び藤永薫先生が働かれておられた。梅谷先生には我々家族の住居探しやら子供の小学校入学手続きなど何から何までお世話になり、藤永先生は現在の職場(金沢工業大学)で同僚として活躍頂いている。

いまさら紹介するまでもなく、Freiser 先生は、有機化学、物理化学、分子構造物性論等を基盤とされた深い知識による「溶媒抽出法によるキレート生成」「金属イオン分離法」「金属キレート生成の速度論的研究」等の幅広い研究をされておられた。これらの研究分野での学会活動は Pittsburg Conference on Analytical Chemistry & Applied Spectroscopy で中心的な立場(組織委員長)におられ、筆者も New Orleans で開催された Pitts Con に招いて頂き、梅谷先生や鶴房繁和先生(朝日大学)等と発表を行ったのが今では素晴らしい思い出となっている。また国際溶媒抽出会議では Pillar と言われる存在で会議を盛り上げ、1996年の国際溶媒抽出会議(開催地

Melbourne, 実行委員長 J. W. Stevens 先生)では最高の賞である Hanson Medal を授与された。筆者はこの時 Freiser 先生が取り持って下さった Melbourne 大学の J.W. Stevens 先生(1996年から2014年まで国際溶媒抽出会議の Secretary General)と20年余りにわたり毎年双方が相手方を訪ねる関係 (Stevens 先生が金沢工業大学客員教授で筆者がメルボルン大学名誉教授)が続いている。これも Freiser 先生からのプレゼントとして、今後も大切にしていきたい。

Freiser 先生自身も日本を訪れて下さり、筆者の前職である科学技術庁無機材質研究所(所在地:筑波、現在は衣替えして、文部科学省物質・材料研究機構)に奥様 (Edie さん) と共に3週間滞在(日米2国間科学技術協定)して頂いた。筆者は「あんな大先生と共に3週間もご一緒できる。」と有頂天になったのを記憶している。研究以外のエピソードを二つほど書かせて頂きます。筑波の田舎町を自動車で移動中「小松さん、あの木は何と言いますか?」と聞かれたので「バンブーです。」と答えたら「タケ?」とおっしゃいました。何でもない会話かと思っていたら、Freiser 先生が補足して下さいました。「タケ」とはユダヤ語で「本当?」と言う意味だそうです (Freiser 先生のダジャレは手が込んでいます)。二つ目は日本語をかなり勉強されており、我が家に貼ってあった「小学生の漢字リスト」をすべて読めた Freiser 先生の失敗(?)です。ガソリンスタンドに「水・金は女性に限り割引」と書いてあるのを見つけて「小松さん、何でマーキュリーは女性割引なのだ?」と聞かれ運転中の筆者はチンプンカンプンでした。次のガソリンスタンドで指さされた先の看板を見て、Freiser 先生が「水・金」を「水銀」と間違えたことを知りました。かなり高度ですよ! Freiser 先生をお招きした時に京都の海洋化学研究所(故藤永太郎先生主催)の会議に参加され、筆者もお供しました。紀本岳志さんや藤見知愛子さんの手厚いアシストで、お連れする係のはずの筆者も Freiser 先生や Zolotov 先生と共に「錦市場」等を案内して頂きました。

筆者以外の80名ほどの Freiser 門下生達はそれぞれに深い思い出をお持ちと思いますが、これらの皆様と共に Freiser 先生のご冥福をお祈り申し上げます。

[金沢工業大学生活環境研究所 小松 優]